

歩兵第十六聯隊のシベリア出兵

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

【第二部】

「スパスカヤ方面の交戦」

スパスカヤ移転を見合わせていた聯隊本部は、一月二十九日ニコリスクを発し、三十日スパスカヤに着し、所命の配備につき北方第十四師団及び支那軍との連絡に任じた。政情は混沌としており、三月には二個大隊を終結させた。

当時聯隊は、スパスカヤ停車場東の革命軍一団の兵營を占有していた。我が兵營の南方約千五百メートルに亘る間の兵舎はことごとく革命軍が使用し、我が兵舎の北方にある木造兵舎も彼等の使用するものであった。その他駅付近には貨車生活をしている革命軍も居り、自然に包囲されているような平時配置であった。

彼等の総数は、歩兵二千、騎兵約百、鉄道隊約百五十、飛行隊約二百、野砲六門、機関銃二十、飛行機二十一機であった。其の後も兵力を増加し、態度は次第に傲慢となり、日本軍を一撃のもとに殲滅すると豪語していた。表面上、我が軍との衝突を避けてはいたが、彼等の横行甚だしく、邦人の飲食店で無銭遊興、暴行等多く、聯隊に巡察の派遣を要請する者も多かった。

大正九年四月五日朝、スパスカヤに於いて革命軍の武装勢力が重砲一門、野砲五門を貨車に積み込むのを発見。午後六時五十分、聯隊長は在ニコリスク北部守備隊長、小田切少将より次の電報を受け取った。

「軍命令ニヨリ、革命軍ノ武装解除ヲ行ウ。其隊ハ予定ノ如ク其地ノ武装ヲ解除スベシ」
聯隊長は直ちに、各隊に警急集合を命じ且つ停車場衛兵に対し敵の大砲を逃がさぬ様監視させた。

五日朝、聯隊命令を受けた第一中隊（岩畔小隊）は停車場の付近にある革命軍部隊四、五十名を集め武装解除を実施した。プラットホームに集合させ、「武装ヲ解ケ」と叫んだところ大部分は刀剣、拳銃、手榴弾等をホームに一旦置いたが、「武装解除ニ応ジテハナラヌ」との敵側の声で、再び地上に置いた兵器を身に着けだした。そこで岩畔少尉は「撃テ」と命令した。かくしてスパスカヤ駅一帯は彼我砲火を交え近距離戦闘が開始された。

少尉は数名の兵を率いて、列車に積載してある野砲を占領。鹵獲した砲はよく見ると最新式のフランス製野砲で独立照準式を採用するものであったが、辛うじてその用法も解ったので眼前三百メートル位の所で盛んに第一中隊方面を射撃している敵装甲列車に信管も切らずに十数発浴びせた。砲弾は機関車に命中し、激しく蒸気を吐き列車乗員は列車を棄てて北方に遁走した。第一中隊長は主力を率い装甲列車目がけ急進。敵は着剣した駈足の中隊を見て不思議な顔をしていた。中隊は直ちに攻撃開始し敵もまた射撃を始めた。

第八中隊は一部を以て東方から、主力を以て西側から前進した時、約百五十の敵が東北方へ退却中を見るや、直ちに停止を命じた。敵は線路に依って反抗したが、交戦約十分で白旗を上げ降伏した。武装解除したルシーノフ大隊長以下二百八十三名の捕虜に上った。

聯隊は各方面で革命軍を撃退しスパスカヤを占領、その後戦場の整理と警戒配置について更に検討するところがあった。戦闘後捕虜尋問の結果、敵は諸兵連合で約三千七百名、遺棄遺体約四百、捕虜五百三十七であった。

四月五日、スパスカヤで敗れた革命軍は、一部北方及び西方に、大部分はドボウスカヤ方向に退却した。

四月七日夕、聯隊は次の情報を得た。

土民及び諜者の言によれば、北方スイヤギノには優勢な敵が集合し馬賊と協力し近くスパスカヤを攻撃せんとしている。その兵力約三千名。この報に聯隊長は迎撃の決心を確立し、次の命令を与えた、

- 一、停車場ニアル館野中隊主力ハ「スパスカヤ」南端鉄道路線両側ニ陣地ヲ占領。
- 二、打田中隊ハ引キ続キ飛行場付近ニ在ッテ敵ヲ拒止。
- 三、安藤第一大隊（第一及第四中隊ノ各一小隊欠、機関銃二挺）ハ日本軍兵舎南側空地ニ集合。
- 四、第七中隊ノ中島小隊ハ依然市内ニ。
- 五、水野鹵獲砲隊ハ現在セル停車場付近ニ陣地占領。
- 六、木村第四中隊ノ一小隊、相沢第八中隊、佐分利機関銃隊主力、狙撃砲隊ハ日本軍兵舎ニ集合。

八日午前五時四十分、敵攻撃開始、射撃場高地に在る浦山小隊は敵が接近するまで自重し、至近距離で射撃開始、ために多数の死傷者を出し莫大な損害を与え、攻撃前進に移った敵の初動に一泡吹かせた。

スパスカヤ西南方二千五百メートルのセメント工場付近にある敵装甲車上の砲兵は射撃を開始した。午前六時三十分敵歩兵は一斉に前進開始し、その兵力約八百、その後方に更に有力な部隊があるが如く。

午前六時四十分、聯隊長は各個に次の命令を下した。

- 一、第一大隊ハ旧革命軍兵舎ニ終結シ、機ヲ見テ攻撃ニ転ズベシ。
- 二、第二大隊長ハ第五中隊（一小隊欠）機関銃二挺ヲ指揮シ旧革命軍兵舎東側朝鮮人部落方向ヨリ飛行場方面ノ敵ヲ攻撃スベシ。
- 三、第四中隊ノ一小隊、第八中隊、狙撃砲隊ハ予備隊トス。

午前六時五十分、第一大隊は敵情偵察の結果右翼方面の敵は緊迫の様様なく第六中隊方面に敵の主攻あるを知り、午前七時三十分、先ず第一中隊を展開した。

六中隊方面には約三百の敵、前進を開始し迫っていた。格納庫南方丘陵に陣地を占領し敵と対戦、この丘は起伏多く雑樹繁茂し、運動射撃共に困難で敵接近に伴い所々で敵が「ウラー、ウラー」と喊声をあげれば、味方は「万歳、万歳」ととなえ彼我混乱するようになり、斎藤少尉の如き敵と格闘し敵の剣先は少尉の帽子のヒサシに突き刺さるという程であった。中隊は弾薬欠乏し、最後の「天皇陛下万歳」「第六中隊万歳」を唱え全員突撃に移らんとした時、丁度予備隊から弾薬補充され勇気百倍した。

この間格納庫東方平地を前進した敵は格納庫に侵入するに至り、第二大隊の率いる一個中隊がこれに当たり、格納庫に突入し猛射したため、この敵は撃退された。さらに第一大隊の第二中隊、第三中隊を第六中隊に増加し敵を攻撃。漸く敵は動揺し始め、退却を始め第一、第二大隊共に追撃前進に移り敵を潰乱に陥れた。

我が損害は戦死下士官以下三名、負傷准士官以下七名で敵の遺棄死体は三百を超えた。其の後停戦協定が結ばれ、暫くレフ河以北の守備についていたが、大正九年九月三十日南部守備隊として、ラズドリノーエに至り守備勤務に服した。

大正十年五月、聯隊は内地帰還を命ぜられ歩兵第六十二聯隊（徳島）と守備勤務交代、五月十三日ラズドリノーエ出発、十九日ウラジオ出港二十二日敦賀港到着、二十四日懐かしの菖蒲城（新発田）に帰還した。

顧みれば大正八年十月、新発田出発以来、実に一年有八か月、この極寒、猛暑に耐え、あらゆる困苦欠乏を忍び凶暴な匪徒を掃討し重責を全うした。特にスパスカヤの激戦での成功は、新発田聯隊の名声を一層高めた。

名誉の戦病死者 将校以下六十七名。

（歩兵第十六聯隊史編纂より）

平成二十六年七月十五日の新潟日報の記事にフランス革命記念日の十四日、パリのシャンゼリゼ通りで恒例の軍事パレードが行われ日の丸を掲げて自衛官三人が行進したとの記事があったが、今から百年前の第一次世界大戦の時、当時フランスと同じ同盟国として戦った国として招待されたものである。